

誓願一仏乗の機

藤 元 雅 文

はじめに

親鸞の誓願一仏乗開顕のいとなみは、法然の浄土宗立宗という意義をその根底に置いて明確化されるものである^①。法然が明らかにした選択本願念仏の教えは、観念的な内容にとどまることなく、事実様々な違いを生きる人間を、同じく齊しく速やかに迷いから超えさせる一乗の法であることを、親鸞は誓願一仏乗として顕かにしていく。その視点から、親鸞が究明する「誓願一仏乗の機」について考察することが、小論の目的である。この課題を考察するにあたって、まず本願において機の相を「きらわずえらばず」と言われるその意義を押さえた。その上で、本願の機という自覚の内実を究明し、更に本願一乗海のはたらきを親鸞の言葉に確かめ、最後に一乗海の機を眞実信心に見定める親鸞の視座を尋ねていきたいと思う。

一 きらわずえらばざる本願の意（こころ）

本願が喚びかける機は、『大無量寿経』に「十方衆生」と説かれ、また本願成就文では「諸有衆生」と表される。

この釈尊の教言において明説される十方、諸有の衆生に対し願われ誓われる本願の意を受けとめて、法然は『選択集』「本願章」に

故知、念佛易、故通於一切、諸行難、故不通諸機。然則爲令一切衆生、平等往生、捨難取易爲本願。歟。…中略…彌陀如來、法藏比丘之昔、被催平等慈悲、普爲攝於一切、不以造像・起塔等諸行、爲往生本願、唯以稱名念佛一行爲其本願也。

〔真聖全集〕一 九四四―九五頁

と、言明する。一切衆生に通じていく易行・称名念佛は平等の慈悲を根元とする法藏菩薩の本願において選択され、それ以外の行は一切衆生の平等往生を願う法藏の願心において選び捨てられたのであると言われる。かかる法然の視点は仏教の名のもとにさえ、えらばれきらわれて、往生の望みを絶たれてきた人びとに対する現実を見据え、それらの人びとを皆撰取せんとする本願念仏の教えを明らかにする所にある。従つて、法然は称名念仏を下機誘引の方便と理解してきた聖道の仏教に対し、廃立という明確な態度をもつて、あらゆる機を決してえらぶことのない選択本願念仏の一道を浄土宗として高く掲げるのである。

法然は「本願章」において、このように法藏菩薩の平等なる願心を明らかにした上で、その意義を明瞭に語る釈文として、法照禪師『五会法事讚』の次の文を引く。

彼佛因中立弘誓、聞名念我、總迎來。不簡貧窮將富貴、不簡下智與高才、不簡多聞持淨戒、不簡破戒罪根深、但使迴心多念佛、能令瓦礫變成黃金。

〔真聖全集〕一 九四五頁

この文に、法然は、本願の行を選択する法藏菩薩の願心が言明されていることを見いだすのである。

この同じ文について親鸞は非常に丁寧な註釈を『唯信鈔文意』に記している。親鸞は、その中で、この文の要点について

すべてよきひと、あしきひと、たふときひと、いやしきひとを、无寻光佛の御ちかひにはきはらずえらばれず、

これをみちびきたまふをさきとしむねとするなり。眞實信心をうれば實報土にむまるとおしえたまへるを、淨土と明らかにする。この具体的な機のあり方を「きはらずえらばれず」に、あらゆる衆生を育しく速やかに迷いから超えさせていく本願の教えは、すべての衆生を導きたもうことを先とし、宗とするのであり、淨土眞宗の正意は、眞實信心こそ眞實報土の因であることを教えることにあると、親鸞は確かめるのである。

〔定親全〕第三卷 和文篇 一六六―六七頁

機の相はいかなるものであつても、一切の存在者をきらわずえらばずに、喚びかけ導きたもうということは、換言すれば、本願は一切の存在者に導かれねばならない課題性を有する者として、関わるということである。この意義を少しく考えてみたい。

親鸞は、例えば『五会法事讚』の「不簡破戒罪根深」を註釈する中で

「不簡破戒罪根深」といふは、破戒は：中略：よろづの道俗の戒品をうけて、やぶりすてたるものこれらをきはらずとなり

〔定親全〕第三卷 和文篇 一六六頁

と記して、いかなる機の相もきらうことなくえらびすてない本願の平等性を明言する。と同時に『五会法事讚』「不簡多聞持淨戒」についての親鸞の註釈を見ると、「不簡」の内容のもう一つの意義を確かめることができる。

多聞は聖教をひろくおほくき、信ずるなり。持はたもつといふ、たもつといふはならいまなぶことをうしなわずちらさぬなり。：中略：道俗の戒品これらをたもつを持といふ。かやうのさまざまの戒品をたもてるいみじきひとくも、他力眞實の信心をえてのちに眞實報土には往生をとぐるなり。みづからのおのくの戒善、おのくの自力の信、自力の善にては實報土にはむまれずとなり。

〔定親全〕第三卷 和文篇 一六五―一六頁

ここで親鸞は「不簡」の意義を、あらゆる機の相をきらうことなくえらびすてないという意味ではなく、多聞持戒するいみじき人びとの、みづからの善をたのむあり方では、眞實報土に生まれることは決してできないという「えらび

とらない」意として註釈するのである。この親鸞の註釈の背景には、煩惱具足の身に於いて、自力の心は、いかなる様相をもってそれが現れたとしても、そこには欺瞞が存在するという人間存在の課題への凝視があると言えよう。

そうすると、いかなる機の相をもえらばずきらわずに、導きたまう本願の意は、一方で機の善し悪しという区別によって、その道も選別されていくことを徹底して無化すると共に、自力に基づく善行、自力をよりどころとする信を決してえらびとることはないという二重の意義を持つているということである。ここに、いかなる機も本願によって導かれることを先とし、宗としなければならぬと明言する親鸞の視座があると言えよう。

では、一切衆生が本願によって導かれねばならないと明言する親鸞の確かめ、言い換えるなら、一切衆生を本願の機として見いだすその意義を、どのように考えることができるであろうか。

その点について、次節で考察していききたい。

二 本願の機

親鸞は『教行信証』「教巻」冒頭に、真実教を「『大無量寿経』是なり」と顕示して、『大経』の大意を以下のように述べる。

斯經大意者彌陀超發於誓廣開法藏致哀凡小選施功德之寶釋迦出興於世光闡道教欲拯群萌惠以眞實之利是以說如來本願爲經宗致即以佛名號爲經體也
（『定本』 九頁）

ここで、親鸞は本願の機を「凡小」・「群萌」と明確に確かめているが、この表現にどのような内実があるのだろうか。

『教行信証』には、選択本願における機について記す時、人間の有り様を具体的に指し示す「一切善惡大小凡愚」或は「大小聖人重輕惡人」^③と表現する箇所がある。これは、人間の分別智においては、一切善惡大小凡愚という区別

された認識こそ意識される事実なのであって、そうした意識の中で生きる人間の現実をはつきりと見据える表現であると言えよう。親鸞がこのように機を善悪大小凡愚と表現する意義は重要である。なぜなら、人間の分別智に基づく意識においては善悪大小凡愚という具体性こそ機への現実的認識だからである。親鸞は、この人間の分別智における認識を受け止めた上で、けれどもそれがそう意識されてるように衆生に善悪大小凡愚の差異を成り立たせている根源へと眼を向けている。その根源をつきつめた所に表現されてくる言葉が『歎異抄』第十三条において語られる

さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし

(『定親全』第四卷 言行篇(1) 一三頁)

という文に明瞭に確かめられる業縁存在としての衆生の在り方である。これは、善人悪人といい、大小の聖人といい、凡夫愚者といっても、人間の意識において事実成り立っている事柄が徹頭徹尾、さるべき業縁に依って在るものではないことを教示する言葉であり、分別意識の実体化を根底から覆し、その意識の実体化が虚妄でしかないことを教える厳格な教言である。この教言は、業縁にさらされ、翻弄されながら生きるしかない人間存在そのものへの目覚めを、人間自身の中に促すものである。また、縁に依って生きる存在者とは、自身のどこにも依るべき根柢のない存在者であり、善をなし、悪をなし、或は聖者と敬われる事実があつたとしても、自らの内にそういわれる根柢を見いだすことのできない者である。ただ縁によるという人間存在のあり方そのものが、そこには存在するだけなのである。この業縁存在として生きる一切衆生をこそ、親鸞は本願の機である凡小、群萌の内実とうなずいていると考える。つまり、本願の教えとは、一切の予断を廃して、業縁を生きる群萌、凡小としての自身に出あわせ、その機への目覚めを教え導くものと言えよう。従って、群萌、凡小なる存在者がまずあって、その者が自身を認識するという予想的な説明を完全に撤回させるような目覚めが、本願における機の自覚である。

しかし衆生の分別意識は、そのような厳然たる業縁存在の事実の中にありながら、その事実が目覚めたつことがないという問題性を抱えている。事実を事実のままにうなずくことなく、永遠に自己関心の中にその事実をすり替えて

いく衆生の課題性である。そうであるからこそ、本願は一切衆生をみちびきたまうを先とし宗としなければならぬのである。

このように考えていくと、本願の機として自己を見いだすということは決定的な事柄なのである。本願の機として自らを見いだすということなしには、本願といっても、本願の仏道といっても、それは思弁的な理解を突破することはできない。更に本願の機という自覚は単なる自己反省によつては成り立ちえない。いかに厳格に自己認識を遂行していつても、それは決して機の自覚でもなければ、本願の機として自己を見いだすことでもないのである。自己反省に決定的に欠けているのは、何の疑いもなく前提としている自らの依止を知らせ、自己の要求そのものの意義を明らかにし、人間存在の大地から自己の在り方を遊離させることなく、人間存在の課題性を事実において明らかにする、そういう教えとの値遇である。従つて、その教えとの値遇のもとに明らかになる凡小、群萌の自覚とは、人間が生きる大地から一歩も離れない所に成り立つ最も厳しい人間存在への目覚めにほかならない。従つて、「教巻」冒頭『大經』の大意において、本願の機として確かめられた凡小、群萌という言葉は、人間の分別智において捉えられる人間の一つのあり方を指す言葉ではなく、いわば仏教の歴史、殊に浄土教において凝視されつづけてきた人間存在そのものを示し表す教言として受けとめられねばならないのである。

そのように一切衆生を凡小と目覚めさせ、群萌とよびかける本願のはたらきを親鸞は、弘誓一乗海の教えとして明らかにする。そこで次節では、本願が一切衆生にはたらく弘誓一乗海の内実を、考察していきたい。

三 弘誓一乗海の力用

親鸞は「教行信証」「行巻」一乗海積において、選択本願念仏の教えが一仏乗の教えであることを明言していく。そこで親鸞は一乗海積を一乗積と海積とに分けて、弘誓一乗海のはたらきを推究するが、一乗積についての眼目は

言「一乗海」者「一乗者」中略…唯是誓願一佛乘也

〔定本〕 七六頁

と云い切る所にある。なぜなら、一乗釈の文章はこの一言がなければ、法然・親鸞が訣別した聖道門における「一乗」の意義を明かす引文ともなることができるからである。実際に「一乗」についての最初の御自釈は『勝鬘經』「一乗章」の文、或いは『一乗要決』「大文第八」の「辨餘經一乗」中の文がその背景であると指摘される。更に御自釈の後の『涅槃經』の引文のうち、二つの文章が「法華一乗」を明かす『一乗要決』にも引用されている。従って、この「唯是」という言葉に親鸞の決して曖昧にされてはならない確かめを見いだすことができる。つまり、「唯是」と言い切らせる誓願一仏乗の内実なしには、一乗の教えの具体性はないのである。

この「唯是誓願一仏乗也」という表現は、御自釈の後の『涅槃經』「華嚴經」の引文において、清浄にして無二なる唯一道として、更には、その唯一道に一切衆生が帰し、しかも一切の無碍人が、その唯一道によって生死を出離することとして確められる。従って、親鸞にとって一仏乗とは、一切の無碍人が清浄なる唯一道によって生死を出で、しかも一切衆生が帰し、齊一に得る所の一乗、つまり一切性において明確になる唯一道を表している。

更に、親鸞が本願と一乗について言及する中に

いま一乗とまふすは、本願なり。

〔定親全〕 第三卷 和文篇 一四五頁

という端的な表現がある。これは、誓願こそ一乗の意義を全うするものであることを示す表現である。つまり親鸞が一乗と本願とについて確かめようとしている事柄は、一乗とは「唯是誓願」にほかならず、唯是誓願ということをして、一仏乗の具体的な意義を明確にしているということである。その一乗と明示される誓願の具体的なはたらき、つまり本願一乗海の衆生における具体的な力用を明らかにする箇所が一乗釈に続く海釈である。

では、海釈における究明を以下見ていこう。親鸞は、海釈の冒頭に

言「海」者從「久遠」已來轉「凡聖所修雜修雜善川水」轉「逆謗闡提恒沙无明海水」成「本願大悲智慧眞實恒沙萬德大寶

海水^ト「喩^ル之^ヲ如^キ海^ニ」也

〔定本〕 七八頁

と海の転成のはたらきについて明らかにし、更に

願海者不^{ハス}三^宿二^乘雜善^ノ中^ノ下^ノ屍骸^ヲ何^ニ況^{ヤム}宿^ニ人^ノ天^ノ虛^ノ假^ノ邪^ノ偽^ノ善^ノ業^ノ雜^ノ毒^ノ雜^ノ心^ノ屍骸^ニ乎

〔定本〕 七八―九頁

と願海の不宿の性質について確かめている。この転成と不宿のはたらきを明示するために、親鸞は弘誓一乗の法を「海」に喩えるのである。

この御自釈の中でまず注目したいのは、親鸞が「逆謗闡提恒沙无明」を海水と明記することである。ここで衆生の無明のあり方を海水と喩えるのは、すべての諸善川水を無明の海水へと転成してしまふ底知れない無明の深さを表現するためであろう。つまり、親鸞における無明海水の感得は、その深さにおいても広さにおいても測り知ることのできない無明のただ中へと飲み込まれ、沈み込んでいく衆生のあり方を表すと考えられる。その無明の海水を深広無涯底なる願海が大宝海水へと転成するという親鸞の確かめは、だからこそ、この上なき本願力の功德をうなずかせずにはおかない感動を語る表現であり、そこに親鸞が確かめる願海一乗のはたらきを明確にみてとることができる。

更にこの願海は転成のはたらきを不宿という自力各別の心とその上に成り立つあらゆる業行への絶対否定をともなつて成就する。それは文字通り絶対否定であり、いかなる自力の執心をも宿すことを許さない願海の質を明示する。しかも願海の不宿は願海そのものへの転成を成就する絶対否定である。これは願海の絶対否定を通してのみ、二乗菩薩人天逆謗闡提なる一切の存在者が皆同じく斉しく「本願大悲智慧眞實恒沙萬徳大寶海水」へと転成することを示している。これは一乗釈において親鸞が「死^シ有^{コト}二^乘三^乘二^乘三^乘者^ハ入^{ラシメ}ムト^リ於^ニ一^乗一^乗者^ハ即^チ第^一義^乘唯^ニ是^{ナリ}誓^願一^佛乘^也」^⑨と確かめる事柄の内実を語り示すものであり、これこそ願海一乗と親鸞が確かめる具体的な力用である。

以上、親鸞の海釈についての確かめをまとめると、まず願海の転成、不宿としてのはたらきを明かし、あらゆる存

在者を転成させる願海の厳肅なはたらきを明確にする。その願海のはたらきは、凡聖人天二乗菩薩逆誘闡提という、徹頭徹尾その業縁に従つて各別性を生きたる衆生において、不宿という絶対否定を通して、その自力の欺瞞性を打ち破り転じて皆同じく齊しく、功德の大宝海水へとかえなす力用であると同時に、その業縁存在である衆生が底知れない無明の深みの中にどれほど沈みこもうとも、その無明そのものを転じかえ成す力用でもある。これこそ親鸞が「唯是誓願一仏乗也」と確かめた願海一乗の具体的な内実である。

このように本願一乗海を明らかにした上で、親鸞は、一乗海の機を金剛の信心と示し、それは絶対にして不二であると言いつ切る。どのような自覚がこの切言を生み出しているのか、そのことについて最後に考察していきたい。

四 一乗海の機

親鸞は、誓願一仏乗の機について

按^{スルニ}一乗海之機^ヲ金剛信心^ノ絶対不二^ノ機也

〔定本〕 八二頁

と述べる。つまり、弘誓一乗海が衆生に成就するのは、具体的には金剛の信心の成就としてであると親鸞は明言する。従つて、「一乗海之機」を明らかにするという問題は、親鸞における信心の究明と大きく関わっている。殊に本願における如来の願心と衆生に獲得される真実信心との関係を推究する三一問答は、弘誓一乗海の至徳と、一乗海の機としての金剛の信心を究明するためには必須の課題である。ただ、ここで「信卷」三一問答の究明を全体に亘つて展開することはできないので、その要点のみを押さえることとしたい。

「信卷」三一問答において、親鸞は、自身に発起した信心を、最も根源的には、清淨願心が回向成就した心として究明し

爾者若行若信^{ハハ}无^シ有^{コト}一事^{トシテ}非^レ阿彌陀如來清淨願心之所^ニ回向成就^{シタマフ}非^下无^ニ因^ノ他因^ノ有^上也^{トシテ}可知^ル

と顕かにする。つまり、親鸞の願と信に対する推究は、清浄願心と信心とは「畢竟即一」であることを明確化する。より具体的に言えば、「大小聖人重軽悪人」「菩薩二乗」「逆謗闡提」という、あらゆる業縁の中で具体的な差異を生きる「われら」を、皆同じく斉しく救済せんとする清浄願心は、衆生に眞実信心として成就することを親鸞は明らかにするのである。この究明は、一乗海の機を明らかにすることを課題とする考察にとつて決定的な意義を持つ。というのは、この願と信への推究は、誓願一仏乗を正しく了受する機が信心であるということ以上に、弘誓一乗海のはたらしは金剛の信心として現前現成し、言わば眞実信心を獲得したひとは、本願一乗海のはたらしを生きることに成るとまで切言できる内容を持っているからである。一切を平等に救わんとする教えが、いかなる欺瞞をも超え、あらゆる虚偽をも拒絶する形で成就する機こそ眞実信心を獲得するひとであり、あらゆる存在者が、斉しく同じく唯一の道において生死を出離することができる教法の内実とその教法が具体的に成就する機とを親鸞は金剛の信心、眞実信心として明確化するのである。

従つて、一乗海の機としての眞実信心とは、その内実として弘誓一乗海の法を必然する自覚内容であると共に、あらゆる差異を現実にも容認し生み出しながら、高踏的に教理としてのみ一切の平等の救済を語る教えを、つねに批判吟味する機であると言えよう。

確かに信心とは、一人一人において獲得すべき課題であり、「親鸞一人」^⑩と言われるように「一人」の課題と責任において発起すべき事柄である。と同時に、その一人の誕生は、現実の生活のうちに差異、差別を作り続ける人間存在の足下にあつて、弘誓一乗の悲願の教えのもとに大悲招喚の声を常に聞きつつ、その一步一步の歩みにおいて悲願の一乗を確かに証し生き抜いていく機の誕生を明かし示すのである。このように親鸞が甚深の意義を込めて開顕する眞実信心を本願一乗海の絶対不二の機として言明する所には、清浄願心の回向成就である金剛の信心を獲得したひと

は、時代や社会、文化を超えて真に大乘、一乗と言いつる教えに生きるものとなるという明確な確かめがある。それは、その教えに生きんとするわれら一人一人において、常に確かめられねばならない具体的な歩みを教え示している。それゆえにこそ、この具体的な課題において、親鸞は、一人一人が生きる現実のただ中に、仏願の生起本末の意義を聞き聞き、選択本願の行信を獲得せよと、発遣しつづけている。従って誓願一仏乗の機を究明して明確となる具体的な課題とは一人一人における信心の獲得にほかならないのであるということ最後に確かめて小論を閉じたいと思う。

おわりに

以上、誓願一仏乗の機について考察してきた。

最後に確認しておきたいことは、親鸞が誓願一仏乗の機を究明するその根底には、大乘・一乗として教えられてきた仏教の歴史への告発を現実の生き様のうちに最も鋭く表現する人びと、つまり親鸞がその一人として共に生きあつた「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」^①のいのちの要求に応答する教えが一体どこに成り立つのかという非常に具体的な課題があったことである。

確かに、親鸞が学んだ比叡山における法華教学においても、あるいは華嚴の教学においても、一乗の教え、円融の道理が非常に重要な意義を持って伝え語られ突きつめられてきたのである。しかし、前述の課題に促された親鸞にとつて、人間の身の問題性を偽ることなく、「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」に確かに迷いを超えていく道をはっきりと指し示したのは、「唯是誓願一仏乗」であった。親鸞が、自身の生涯を尽くして明らかにしつづけた真宗開顕とは、それまでの仏教の歴史全体を力の限り、ほりおこしながら、確かにその歴史の中に、まぎれもなく一乗の法として伝統され明かされてきた教えがあったことを、そして、その教えを生きる機を、信心の成就として確かに生み出してきたことを明かすいとなみであると言えるのではないか。

その親鸞のいとなみに更に更に学んでいきたいと考える。

註

- ① 拙稿「親鸞における一仏乘開顯の祝慶」(『親鸞教学』八九号)参照。
- ② 『定本』 八四頁
- ③ 同右 六七頁
- ④ 『大正藏』第十二卷 二二〇c—二二一a
- ⑤ 同右 第七十四卷 二七・b
- ⑥ この一乗釈の御自釈の典拠について、智暹の『樹心録』や慧琳の『六要鈔補』以降の講録のほとんどが『勝鬘經』を指摘している。また、法住の『金剛録』指摘以降、源信の『一乗要決』をその典拠と考える人も多い。また、この御自釈について『法華經』の影響を指摘するものもある。
- ⑦ 「行卷」と同様の『一乗要決』の引文を以下挙げておく。

一切衆生。皆歸一道。一道者大乘也。 (『大正藏』第七十四卷 三四九a)

究竟畢竟者。一切衆生。所得一乘。一乘者。名爲佛性。以是義故。我說一切衆生悉有佛性。一切衆生悉有一乘。以無明覆故。不能得見。 (『大正藏』第七十四卷 三四六b)
- ⑧ 一乗釈における『涅槃經』『華嚴經』の以下の引文が、このことを示している。

『涅槃經』言善男子實諦者名曰大乘。中略。實諦者一道清淨。先有二也。又言云何菩薩信順一實菩薩了知一切衆生。皆歸一道。道者謂大乘也。中略。又言。究竟畢竟者一切衆生所得一乘。中略。又言云何爲一切衆生悉一乘。故。中略。已 (『定本』 七六一—七頁)

『華嚴經』言。中略。法王唯法。一切无導人。道出。生死。中略。已 (『定本』 七八頁)
- ⑨ 『定本』 七六頁
- ⑩ 『定親全』第四卷 言行篇(1) 三七頁

① 『定親全』第三卷 和文篇 一六九頁

※主な引用文の典拠は次のように略記した。

『真宗聖教全書』 …… 『真聖全』

『定本親鸞聖人全集』 …… 『定親全』

『定本教行信証』 …… 『定本』

『大正新脩大藏經』 …… 『大正藏』

※学術論文ということ踏まえ、敬称は割愛した。